

# 近代岡山における泊園書院出身者の事業活動の一考察

— 実業家星島謹一郎・中野寿吉を中心に —

横 山 俊一郎

## Business activities of two graduates of Hakuen Shoin — Hoshijima Kinichiro and Nakano Jukichi — in the modern Okayama Prefecture

YOKOYAMA Shunichiro

This paper investigates business activities and the underlying consciousness of Hoshijima Kinichiro and Nakano Jukichi, businessmen in the modern-day Okayama Prefecture, to better understand the nature of businessmen who graduated from the Hakuen Shoin Confucian school. The results reveal that Kinichiro approached how to handle himself through the world of Confucian technical terms, and Jukichi cultivated his practical knowledge in his personal connections with the Shizutani-Kou Confucian school. They shared the view of life, study, and religion, which their teacher, Fujisawa Nangaku, advocated in Hakuen Shoin.

キーワード：泊園書院 (Hakuen-Shoin)、藤澤南岳 (Fujisawa Nangaku)、星島謹一郎 (Hoshijima Kinichiro)、中野寿吉 (Nakano Jukichi)、実業家 (businessmen)

## はじめに

大阪の泊園書院は近代日本の工業化を支えた多数の実業家を輩出した漢学塾である。しかも彼らは大阪のみならず地方にまで広範囲に存在した。ところが、彼ら実業家を取り上げた研究はほとんどなく、筆者がそのうちの数名を取り上げたに過ぎない<sup>1)</sup>。本稿はこれまでと同様に、近代における泊園書院出身者の事業活動の一事例として、岡山県の実業家、星島謹一郎（号鳴滝）と中野寿吉（号静堂）を取り上げ、泊園書院出身実業家の性格を知る手掛かりとする<sup>2)</sup>。

明治期において彼らが泊園書院で学んだことは、彼らの事蹟が記された伝記類を見ると明らかであるが、明治38年（1905）初頭刊行とされる『第拾五六回泊園同窓会誌』〔LH2/丙96-15/16〕（編集兼発行者は不明）附載の門人名簿『登門録』にも彼らの姓名が確かに記されている<sup>3)</sup>。また、彼らが退塾後も泊園書院との関わりを維持しようと努めていたことは、当時の院主藤澤南岳の還暦祝賀会（1902）と古稀寿筵会（1911）に二人が「門生」として何らかの形で参加している点から見てそのように推察することができる<sup>4)</sup>。

一方、彼らの就学状況については、塾生の毎月の成績表であった『生員勤惰表（勤惰月旦評）』〔LH2/丙101-1～101-8〕によって推測することができる<sup>5)</sup>。

それによると、まず星島は、明治11年（1878）3月に六等上生として記されたのち、同様の記載が同年4月にもなされ、同年5月になると五等生に昇級している。その後、翌明治12年

1) 拙著『泊園書院の明治維新——政策者と企業家たち——』（清文堂出版、2018年）。拙稿「山口県宇部地域における泊園書院出身者の事業活動の一考察——渡辺祐策を支えた名望家を中心に——」（『東西学術研究所紀要』第51輯、関西大学東西学術研究所、2018年、351-371頁）。

2) 『日本全国商工人名録③』（渋谷隆一編『明治期日本全国資産家地主資料集成Ⅲ』柏書房、1984年、171頁）によると、星島は明治31年（1898）において岡山県内で三番目、同県児島郡内で二番目の納税額であった。

3) 『登門録』のうち「岡山県児島郡藤戸村」（星島謹一郎）、「岡山県浅口郡玉島町吉備紡績所内」（中野寿吉）。なお、『登門録』は吾妻重二編著『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1——』関西大学東西学術研究所資料集刊29-1（関西大学出版部、2010年）に影印されている（447～460頁）。LH2以下は関西大学総合図書館の請求記号である。

4) 還暦祝賀会については、明治36年（1903）刊行の『第拾四回泊園同窓会誌』〔LH2/丙96-14〕（編集兼発行者は篠田栗夫）、古稀寿筵会については、大正6年（1917）刊行の『第貳拾参四五回泊園同窓会誌』〔LH2/丙96-23/26〕（編集兼発行者は梅見春吉）を参照。それらによると、星島の場合、両者とも出席者として、中野の場合、前者は祝儀寄贈者として、後者は出席者として参加している。

5) 『生員勤惰表（勤惰月旦評）』は全八冊の藤澤南岳筆による大和綴じの横本であり、罫線によって上下四段に分けられ、等級と学生の姓名が記載されたものである。等級は二等上から九等下まで分けられ、三等以上が高等とされた。なお、同書の二冊目〔明治12年（1879）1月—明治15年（1882）12月〕と三冊目〔明治17年（1884）1月—明治19年（1886）12月〕の間の成績表は欠落している。そのため、後述するように明治16年（1883）における中野の就学状況は確認することができない。

(1879) 2月まで五等生として記されているものの、同年7月に限っては成績表それ自体が欠落しているため星島の就学状況は不明である<sup>6)</sup>。以上の表記は、すべて「星島謹」であった。

次に中野は、明治15年(1882)1月に六等生として記されたのち、同年6月には五等生、同年12月には四等生へと昇級している。この間、同年7月と同年8月は成績表それ自体が欠落しているため中野の就学状況は不明である。また明治16年(1883)の一年分については成績表がまるごと残されていない。その後、明治17年(1884)1月に四等上生として記されたのち、同年6月には三等下生、同年12月には三等上生、翌明治18年(1885)6月には二等下生、同年12月には二等中生、翌明治19年(1886)6月に二等上生へと順調に昇級している。以上の表記は、すべて「中野寿」であった。

本稿では、上記の就学環境にあった星島と中野の略歴を明らかにしつつ、彼らの地元岡山での知人ないしは友人関係の分析を通して、その経世意識に注目する。具体的には、星島は泊園書院の入塾前・退塾後という時間的契機、中野は交流する舞台としての〈地域〉・〈日中〉という空間的契機を踏まえて分析する。そして最後に、実業家として活躍中の星島と中野が彼らの恩師藤澤南岳と共有していた世界を考察することにした。

以上の作業を通して、星島と中野の事業活動を支えた意識とは如何なるものであったか、という問題について幾らか接近することを試みる。

## 1 泊園書院出身者の略歴

本章では、近代岡山における泊園書院出身者、すなわち星島謹一郎と中野寿吉の二人の略歴について、それが最も網羅されている『岡山県歴史人物事典』(山陽新聞社、1994年)の記載内容を参照しつつ、それぞれ確認しておこう。

### (1) 星島謹一郎

実業家・政治家<sup>7)</sup>。児島郡藤戸村の素封家星島啓三郎の長男として安政6年(1859)6月15日

6) この間、明治11年(1878)年5月については「勤踰于衆者」の印、明治12年(1879)1月と同年2月については「不勤過一月者」の印が付されている。

7) 小野敏也「星島謹一郎」(岡山県歴史人物事典編纂委員会編『岡山県歴史人物事典』山陽新聞社、895,896頁)。星島の略伝については、このほか、山田義信編『備作紳士列伝』初篇(精文堂、1890年)5頁、日本現人名辞典発行所編『日本現人名辞典』(日本現人名辞典発行所、1900年)ほノ21頁〔『明治人名辞典Ⅱ』上巻(日本図書センター、1988年)〕、古林亀治郎編『実業家人名辞典』(東京実業通信社、1911年)ホ之部7頁、成瀬麟・土屋周太郎編『大日本人物誌』(八紘社、1913年)ほ之部3頁〔『明治人名辞典Ⅲ』上巻(日本図書センター、1994年)〕、五十嵐栄吉編『大正人名辞典』第三版(東洋新報社、1917年)169頁、

に生まれる。初め犬飼松窓の三余塾で学び、後に大阪へ出て藤澤南岳に師事する。星島家は江戸初期から代々大地主として村政を預かった家柄であり、謹一郎も明治14年（1881）9月17日、21歳で郡区町村制のもとの藤戸村戸長に就任する。明治19年（1886）12月18日、郡村と北浦村（いずれも現岡山市）の戸長に転出し、翌年9月27日辞職。ついで明治21年（1888）1月から県会議員となり、明治30年（1897）3月辞職するまで3期9年間県政に関与する。また明治33年（1900）7月14日に行われた郡会議員選挙に藤戸町から当選し、8月16日には児島郡会の初代議長に選ばれ、明治36年（1903）2月3日、小川十万太に代わる。郡会議員には連続2回当選し、明治37年（1904）7月、2期の途中で辞職した。一方実業界では、金融関係を中心に活躍。明治30年（1897）星島銀行を創立して頭取となり、ほかにも加島銀行、東児銀行、茶屋町銀行、下村銀行等などに関係し重役となる。また備前紡績、児島養貝、正織などの重役を務めて地方産業の育成にも寄与した。大正4年（1915）11月、県下の多額納税者の互選により貴族院議員に当選して同成会に属し、大正7年（1918）にも再選されて大正12年（1923）8月までその職にあった。貴族院議員時代には笠岡湾の埋め立て、干拓、市街地造成に努力したり、宇野港の築港にも尽力した。造庭建築に造詣が深く、明治末に宇野（現玉野市）の山腹に鳴滝園と称する数寄を凝らした別宅を設けて風流を楽しんだが、その一生はまことに紳士的な人であった。昭和17年（1942）2月2日逝去。長男義兵衛は実業界、二男二郎は政界で活躍した。

## (2) 中野寿吉

明治時代の教育者・実業家・政治家<sup>8)</sup>。中野又市の長男として元治2年（1865）1月20日に御津郡福田村（のち福浜村、現岡山市）に生まれる。原泉学舎で西毅一に漢学を学び、ついで明治14年（1881）大阪に出て藤澤南岳に師事し、塾頭となる。明治19年（1886）帰郷し、孟秀学校を設けて教育にあたったが、明治22年（1889）同志社の講師に招聘され、漢学を教える傍ら英語学の研究に取り組んだ。翌明治23年（1890）再建まもない閑谷黌の教師となり、以後5年

---

中西利八編『財界フースヒー』第3版（通俗経済社、1931年）ホの部11頁〔『日本産業人名資料事典Ⅱ』第2巻（日本図書センター、2002年）〕、吉井親一編『近世岡山県先覚者列伝故人百聚』（岡山県先覚者列伝刊行所、1956年）35,36頁、衆議院・参議院編『議会制度百年史』貴族院・参議院議員名鑑（大蔵省印刷局、1990年）220頁がある。

8) 難波保夫「中野寿吉」（前掲『岡山県歴史人物事典』、709頁）。中野の略伝については、このほか、日本現今人名辞典発行所編『日本現今人名辞典』（日本現今人名辞典発行所、1900年）なノ45頁〔『明治人名辞典Ⅱ』上巻（日本図書センター、1988年）〕、柳元静馬編『財界名士失敗談』上巻（毎夕新聞社、1909年）350,351頁、御津郡教育会『岡山県御津郡誌』（御津郡教育会、1923年）357,358頁、岡山県御津郡福浜村編『福浜村誌』（岡山県御津郡福浜村、1927年）208,209頁、岡山市役所編『岡山市史』第5（岡山市役所、1938年）3847頁がある。

間在職。校長西毅一が代議士となったため、学務を代行することが多かったという。明治27年(1894)実業界に入り、備前紡績専務取締役、備前陶器・中国鉄道・御野銀行の各取締役に就任。さらに明治32年(1899)玉島紡績が破産して坂本金弥の手に移り吉備紡績となると、社務の統轄責任者となった。一方で明治33年(1900)1月から翌年10月まで福浜村長を務め、児島湾干拓に伴う藤田組・関係諸村との紛争調停に努力した。明治41年(1908)吉備紡績が倉敷紡績へ買収されたのを機に退社。その後、京都紡績常務取締役、東讃鉄道取締役などを歴任。こうした実業界での活躍の一方、盟友坂本金弥とともに政党活動にも奔走し、県下進歩党の中心的存在でもあった。さらに教育界では閑谷学校再興を図る閑谷保養會に加わり、閑谷巒の分校(のちの岡山巒)を創立・経営するなど、多方面で数多くの足跡を残した。温厚、寛容な人柄で人望が厚かったが、明治45年(1912)1月20日、48歳で急逝した。

## 2 星島の経世意識

本章では、星島の地元岡山での知人関係の分析を通して、その経世意識を探ってみたい。ここで取り上げる知人とは、星島が泊園書院の入塾前に交渉を持った窪田次郎と泊園書院の退塾後に交渉を持った岡本魏の二名である。

### (1) 窪田次郎との交渉——泊園書院の入塾前

本節では、星島が学習結社「蛙鳴群」の一員であった頃に筆写したものと思われる『蛙鳴社条約』(うち「小田県蛙鳴群約束並題辞」)の分析を通して、泊園書院に入塾する前の星島の経世意識を考えてみたい。なお、同書は倉敷市歴史資料整備室の星島和一郎家文書に所蔵されている。

分析する前にまず、「蛙鳴群」の設立者である窪田次郎の略歴を見ておこう。窪田次郎〔天保6年(1835)–明治35年(1902)〕は備後国安那郡加茂村の蘭医の子<sup>9)</sup>。阪谷朗廬と江木鱗水に漢学、山鳴大年・弘齋父子に蘭学を学んだのち、大阪に出て緒方南塾に入門。帰郷し父の跡を継いで医業に従事した。明治5年(1872)小田県の矢野光儀権令あてに「民撰議院設立建白書」を提出、これにより現岡山県下で初の県会が開催された。その後明治7年(1874)学習結社「蛙鳴群」を組織して、県内の人々の啓蒙に努めた。なお、窪田は衛生活動にも尽力し、明治13年(1880)設立の児島郡医学研究会に関係しているが、この研究会は星島の父啓三郎の資金援助に

9) 井上奈緒「窪田次郎」(前掲『岡山県歴史人物事典』、390頁)。有元正雄ほか『明治期地方啓蒙思想家の研究——窪田次郎の思想と行動——』(溪水社、1981年)211頁。

よるものであった。

以下はその窪田らが明治8年(1875)1月に制定した「小田県蛙鳴群約東並題辞」の前文である。なお、同書は前年12月に制定されたのを新たに制定し直したものである。

官ノ為メニ鳴乎私ノ為メニ鳴乎。官地ニ在ル者ハ官ノ為ニシ私地ニ在ル者ハ私ノ為ニス。是古人ノ蛙問答ナリ。而シテ今小田ノ蛙鳴ナル者果シテ何ノ為メニ鳴乎。普天ノ下ヲ以テ命スル時ハ官ノ為メニ鳴クヘシ。地券ノ証ヲ以テ訴フ時ハ私ノ為メニ鳴クヘシ。同シク此一小田ニシテ分鳴センヨリ寧口合テ愛国ノ為メニ和鳴ス可シト。膠漆相投シ同心ノ鳴其臭蘭ノ如シ。嗚呼蛙兒也洲ニ生スル者古来手ヲ下ケ腰ヲ屈シ膝行匍匐シテ其長上ヲ仰クモ前後齊桓ノ礼遇ナク却テ踏蹴蹂躪ノ患害ヲ被リ又ハ長蛇ノ吞併ニ任セ或ハ小兒ノ玩弄ニ附ス。其習慣ノ久キ終ニ蛙性トナレリ。今ヤ維新ノ春田ニ出青陽ノ風光ヲ帯ヒ俄ニ独立並行シテ盛時ヲ鳴カント欲スレバ蛙ノ行列殆トント其方向ヲ失ス。然レトモ只其鬱屈ヲ悲鳴スルモ衆口金銷スルニ至ラズ。利害ヲ討論スルモ嘯集蛙戰ヲ生スルニ至ラズ。謹恭其素志ヲ守リ先進後進ヲ導キ有莘ノ耕暇傳巖ノ築余ヲ以テ孳々舜田ニ号泣セバ終ニ亦和鳴鏘々タルニ至ラン。尚ホ何ゾ頑嚚ノ父母驕傲ノ子弟ヲ嘆キテ黙々井底ニ埋没ス可ケンヤ。天下ノ富ハ是簞食豆羹ノ積ナリ。天下ノ大ハ是一郷ノ堆ナリ。田蛙ノ群鳴モ亦晩夜ノ熟睡ヲ障タルニ足ラン。絶ヘテ九臯ノ声ナキモ或ハ又旻天ニ聞フルコト有ラン乎。狂夫ノ言モ聖人之ヲ察シ飛蛙モ神筆ノ輔トナルコト有リ。相識シテ約束スルコト左ノ如シ<sup>10)</sup>。

このように、窪田らはまず、地租の徴収を命じる政府とその軽減を訴える民衆とが分鳴するのではなく、互いに手を取り合って「愛国」のために和鳴すべきだと主張する。多くの人が心を合わせて言う言葉はランの匂いのように影響が大きくなるからである。続けて窪田らはいふ。維新前の民衆は政府に対してひざまずく立場であり、その間「齊桓ノ礼遇」もなく古代中国の賢臣管仲のようにみずからの富国策を実現することもできなかった。そうした慣習が永く続いたために民衆は蛙のようになってしまったのである。しかし維新後になると、民衆はとうとう独り立ちするにいたった。ところが、肝心なところで蛙の行列はその向かうべき方向を失ってしまったという。そこで窪田らは民衆に対して、本来の志を守って「頑嚚ノ父母」と「驕傲ノ子弟」を導きつつ、「有莘ノ耕暇」、すなわち賢臣伊尹のように農耕に、「傳巖ノ築余」、すなわち

10) 『蛙鳴社条約』明治8年(1875)3月写〔倉敷市歴史資料整備室星島和一郎家文書蔵〕。史料上の旧漢字はすべて常用漢字に直した(以下、同様)。

賢臣傳説のように土木工事に従事せよ、という。そうすれば、政府と民衆が和鳴することも盛大なものとなるはずであった。

以上のように、窪田らは地租改正反対闘争による官民の分断を憂慮し、その問題を克服するために愛国というナショナリズムを掲げつつ、民衆に対して政治および経済の両面で主体的自覚を持つよう訴えている。また注目すべきことに、民衆が目指すべき進歩的世界には古代中国の賢臣の徳行と業績がイメージされている。ここに蘭学のみならず漢学に精通していた窪田らの独特な秩序観を見て取ることができる。なお、賢臣管仲を模範とする態度については、明治20年代初頭の南岳の議論にも見られるものであった<sup>11)</sup>。

## (2) 岡本巍との交渉——泊園書院の退塾後

本節では、星島が教化団体「弘道会」の一員であった頃に入手したものと思われる『弘道会規則書』（うち「弘道会設立趣意書」）の分析を通して、泊園書院を退塾した後の星島の経世意識を考えてみたい。なお、同書は倉敷市歴史資料整備室の星島和一郎家文書に所蔵されている。

分析する前にまず、「弘道会」の設立者である岡本巍の略歴を確認しておこう。岡本巍〔嘉永3年（1850）－大正9年（1920）〕は岡山藩士の子<sup>12)</sup>。藩の国史局に出仕したのち、藩の議事院議員と応接方を兼ねた。廃藩後は閑谷学校に山田方谷を招き、閑谷精舎と称する。明治15年（1882）東馬安太・森下景命らと謀って道義を維持するための教化団体「弘道会」を設立し、明治17年（1884）には京都同志社の漢学教授となる。実業家として明治22年（1889）岡山紡績常務取締役、明治24年（1891）岡山セメント社長を歴任した。なお、岡本は明治37年（1904）西穀一のあとを承けて閑谷饗の校長を務め、明治41年（1908）まで在職している。

以下はその岡本らが明治15年（1882）9月に制定した「弘道会設立趣意書」の全文である。なお、同書は同年4月に制定されたのを新たに制定し直したものである。

弘道会ノ標目ヲ定メ分ヲ三ヶ条トス

第一条 王室ヲ尊ヒ邦国ヲ愛スル事

抑我国開闢以來皇統連綿万世不易ノ国体ニシテ苟モ我臣民タル者ハ尊王ノ志ヲ抱カサル者ナク其忠直ノ風実ニ万国無双ノ美俗ト謂フヘシ然ルニ一度民権自由ノ説起リシヨリ輓

11) 前掲『泊園書院の明治維新——政策者と企業家たち——』の補章1「泊園書院の教育と明治・大正期の実業家」の第2節「南岳のいう愛国と国体」。

12) 金谷達夫「岡本巍」（前掲『岡山県歴史人物事典』、242頁）。山田芳則「岡本巍論」（『閑谷学校研究』第11号、財団法人特別史跡閑谷学校顕彰保存会、2007年、35～44頁）。

近世ノ論者或ハ自由ヲ妄信シ或ハ民権ヲ誤認シ其流弊ノ及フ所国家ノ秩序ヲ紊シ名分ヲ  
謬ルニ至ルモ保シ難シ是レ吾輩ノ杞憂措ク克ハサル所以ナリ

### 第二条 文武ヲ講習スル事

我邦武ヲ以テ国ヲ建テシヨリ勇武ノ名東洋ニ冠絶タリ今ヤ奎運ニ遭遇シ徒ニ文学ニ偏倚  
シ人々身体尪弱気力衰耗シ終ニ勇武ノ俗変シテ文弱ノ風ニ陥ル抑文武ハ人ニ両手ノアル  
如ク偏廢シテ人タルヲ得ス故ニ文武ヲ講習シテ筋骨ヲ強壯ニシ胆識ヲ研磨シ固有勇武ノ  
美名ヲ失墜セサラン事ヲ要スルハ吾輩今日ノ急務ナリ

### 第三条 孝悌忠信礼義廉恥ヲ修ムル事

今日最モ吾輩ノ振起セサルヘカラサルモノハ本条ノ標目はレナリ如何トナレハ近世器械  
窮理ノ学ハ固ヨリ利用厚生ノ道開物成務ノ事駁々乎トシテ日ニ進ミ月ニ開ケ其勢ノ趣ク  
所知新ノ一偏ニ傾向シ風俗壞敗品行汚下ナルニ至リ終ニ廉恥廢レ詐偽起リ或ハ奢侈ニ流  
レ遊蕩ニ陥リ殆ント道德仁義ノ風教將ニ地ヲ払ントス是レ吾輩ノ最モ流涕長大息シテ振  
作セサル可カラサル所以ナリ

右三条ノ標目ハ吾輩ノ同心協力奮テ維持振作セサル可カラサルノ時カ此時失フ可カラサル  
ナリ是レ吾輩ノ弘道会ヲ設立スル所以ノ趣意也之ヲ要スルニ會員タルモノ万世不易ノ王室  
ヲ尊ヒ世界無比ノ美風良俗ヲ維持シ徳義ヲ修メ文ヲ講シ武ヲ習ヒ以テ邦家ノ秩序ヲ糾シ名  
分ヲ明ニシ時弊ヲ匡済スルニアリ請フ同盟ノ君子夫レ之ヲ諒セヨ<sup>13)</sup>

このように、岡本らの弘道会の目標は尊王愛国、文武講習、孝悌忠信および礼義廉恥の三ヶ  
条であった。まず「尊王愛国」についてであるが、これは万世一系の国体の実在を根拠として  
尊王の美俗を維持するよう訴えるものである。その背景には自由の盲信と民権の誤認によって  
名分の誤謬が生じたとの認識があった。次に「文武講習」についてである。これは文と武の両  
方を鍛え直すことで見識だけでなく胆力を身につけることである。その背景には建国以来の勇  
武の風俗が文弱のそれへと変化したとの認識があった。最後に「孝悌忠信および礼義廉恥」に  
ついてであるが、詐偽や奢侈の流行に対して廉恥による風教の維持を訴えるものである。その  
背景には器械窮理・利用厚生・開物成務の隆盛によって知新の一偏が生じたとの認識があった。  
これらの実践を要約すると次のようになる。それは①万世一系の皇室を尊んで自国の美風良俗  
を維持する、②徳義を修め文武を講習して国家の秩序を矯正する、③名分を明らかにして当時  
の悪習から救済する、の三プロセスである。

13) 『弘道会規則書』明治15年(1882)9月刊〔倉敷市歴史資料整備室星島和一郎家文書蔵〕。



以上のように、岡本らは自由民権や進歩開化といった当時の新思潮に対して疑念を持ち、一種の時務策として大義名分論を基調とした政教思想の実践を訴えている。またそこには実行力を伴う知識の習得など様々な発想が含まれていたが、廉恥心の拡充による詐偽行為の抑止については、明治20年代初頭における南岳の議論にも見られるものであった<sup>14)</sup>。

### 3 中野の経世意識

本章では、中野の地元岡山での友人関係の分析を通して、その経世意識を探ってみたい。ここで取り上げる友人とは、中野が〈地域〉を舞台として交流を持った坂本金弥と〈日中〉を舞台として交流を持った白岩龍平の二名である。

#### (1) 坂本金弥との交流 ― 〈地域〉を舞台として

本節では、中野が行動を共にした同志、坂本金弥との関係を記した『本邦綿糸紡績業史』第二巻（うち「坂本氏と中野氏」）の分析を通して、〈地域〉を舞台とした中野の経世意識を考えてみたい。

分析する前にまず、中野の同志であった坂本金弥の略歴を見ておこう。坂本金弥〔元治2年（1865）－大正12年（1923）〕は岡山藩士の子<sup>15)</sup>。森田月瀬に漢学を修め、天城静修館、岡山商法講習所、大阪仏蘭西塾から同志社に学んだ。民権家として鶴鳴会を結成、のち備作同好倶楽部と称し、さらに中国進歩党と改称し、急進主義を唱えた。明治25年（1892）には「中国民報」を創刊する。一方23歳で帯江銅山を経営、中国地方屈指の鉱山業者となる。さらに玉島紡績、その後身の吉備紡績を経営。政治家としては県会議員をへて明治31年（1898）以来7期代議士に当選した。なお、「中国民報」は坂本家の同族経営が基本であったが明治32年（1899）から翌年にかけて一時的に社長名義が中野に変更されている<sup>16)</sup>。

以下はその坂本と中野との関係が記された「坂本氏と中野氏」の全文である。

中野寿吉氏は坂本金弥氏の恩師で曾て憲政会同志の政友であった。又た備前紡績会社取締役同志でもあった。此関係から坂本氏は中野氏を吉備紡に引入れて明治四十一年頃まで勤

14) 前掲『泊園書院の明治維新 ― 政策者と企業家たち ―』の補章1「泊園書院の教育と明治・大正期の実業家」の第4節「南岳のいう自欺と廉恥」。

15) 楠瀬眞「坂本金弥」（前掲『岡山県歴史人物事典』、470,471頁）。

16) 社史編纂委員会編『山陽新聞七十五年史』（山陽新聞社、1954年）135頁。

務せしめた。中野氏は初め大阪の藤澤南岳の漢学塾に入り塾頭を務めた程の秀才で、後ち岡山中学の前身たる藩鬻閑谷学校の校長となり、氏の尽力により建築された分校の廊下が氏の最後の死処に撰ばれたのも奇しき因縁である。氏の死の原因は半田綿行から借入れた綿代金三四十万円の仕払が出来なかったのに在る。東讃電気鉄道に關係して失敗したのにも依る。借財に苦みあせった結果定期で失敗したのが死を急ぐ拍車となった。而して此事実が又た坂本氏をして遂に吉備紡を売却せしむるに至った。中野氏の遺言には決して金を借りる勿れとあったそうだ。吉備紡の事務所に於て、退出時間後事務員及び附近の警官などを集めて論語の講義をなすのを常とした人である<sup>17)</sup>。

このように、「坂本氏と中野氏」には両者の親密な關係が記されている。若干事実關係と異なる記載が見られるものの、中野の思想と行動を探るに当たってとりわけ注目すべきは、以下の六点である。①中野が坂本の何らかの恩師であった点、②中野が坂本の事業上の同志であった点、③中野が閑谷鬻分校の設立に貢献した点、④中野が無理な借財によって自死した点、⑤中野が中四国の企業運営に関与した点、⑥中野が従業員向けに論語講義をした点、である。①と②からすると、中野と坂本は似通った思想のもと行動を共にしていた可能性が考えられる。また④と⑤では、中野はリスクを背負ってみずからの出身地域である中四国の企業経営に関わっていたことがわかる。さらに③と⑥を見ると、中野は地域經濟を担う人材の資質に関わるものとして儒教教養を位置付けていた可能性も考えられる。

いずれにしても、中野は坂本と緊密な關係を築きながら、〈地域〉の政治・經濟・教育の分野で幅広く活動しており、それらの活動全体から見えてくることは、學問と事業を一致させようとする意識の中でみずからの活動を積極的に展開していたことである。

## (2) 白岩龍平との交流 ― 〈日中〉を舞台として

本節では、中野が行動を共にした同志、白岩龍平との關係を記した『白岩龍平日記』（うち明治32年当時）の分析を通して、〈日中〉を舞台とした中野の經世意識を考えてみたい。

分析する前にまず、中野の同志であった白岩龍平の略歴を見ておこう。白岩龍平は美作国吉野郡宮本村の神官の子<sup>18)</sup>。明治23年（1890）荒尾精が上海に日清貿易研究所を創設、全国の俊秀を募った際、野崎武吉郎に学資の援助を請い、同研究所の生徒として渡清。日清戦争後は親交

17) 絹川太一編『本邦綿糸紡績史』第2巻（日本綿業倶楽部、1937年）の第7章「玉島紡績所」の第16節「坂本氏と中野氏」。

18) 吉崎志保子「白岩龍平」（前掲『岡山県歴史人物事典』、532頁）。

のあった清国人と大東汽船を創立、上海と蘇州・杭州を結ぶ航路を開設した。明治31年（1898）近衛篤磨らと計り、東亜同文会の創立に関与する。また明治36年（1903）湖南省内地の航路として湖南汽船会社を創立。さらに明治40年（1907）大東、湖南の後身の日清汽船を創立、推されて専務取締役となった。

以下はその白岩と中野との関係が記された明治32年（1899）当時の記録である。

〔Ⅰ〕 2月15日

回申、渡辺正雄由長崎同舟、従是与余同事、此行携黙堂遺物在岡山交中野寿吉更由大阪経郷里一泊于家於津山与河本実兄及其甥会再出大阪上東京矣、在東京託黙堂肖像模写之事、又在福岡看石碑及記念碑一泊正雄之家<sup>19)</sup>。

〔Ⅱ〕 5月10日

快晴、与西毅一氏次女艶子婚由野崎武吉郎氏媒牧放浪田辺碧堂中野静堂諸友由中賛襄成之也、行式於岡山魚嘉楼西翁夫妻与小西増太郎中野寿吉及家兄佐古武来会列式、上海諸同人祝電到<sup>20)</sup>。

このように、〔Ⅰ〕では、河本黙堂という同志の急逝に際して、白岩がとった日本国内における一連の対応が綴られている。河本磯平〔明治元年（1868）－明治32年（1899）〕、号黙堂は閑谷齋で学んだのち日清貿易研究所に入所。白岩の援助者として大東汽船上海支店長をつとめ、かたわら日、清、英の三か国語を教授する日清英学堂を創設。また明治31年（1898）白岩とともに東亜同文会の機関誌「亜東時報」を創刊した。さて、白岩のスケジュールは①河本の遺品の送還→②河本の親族への説明→③河本の肖像の作成、の三行程であった。ここで注目すべきは、白岩は真っ先に中野と会い、河本の遺品を手渡している点である。また中野はこの年、すなわち明治32年（1899）に先述した坂本とともに東亜同文会に入会している<sup>21)</sup>。推測するに、白岩・河本・中野の三者は親密な関係にあったのだろう。

では、中野は白岩との関係をどのように築いていったのだろうか。これに関しては〔Ⅱ〕に綴られた白岩の西毅一の次女艶子との婚儀の様子を見ると明らかになるだろう。中野は白岩家と西家との媒酌を賛助したのち結婚式にも出席するなど、両家に寄り添う形で白岩の婚儀に立

19) 中村義『白岩龍平日記——アジア主義実業家の生涯——』（研文出版、1999年）273頁。

20) 同上、277頁。

21) 東亜文化研究所編『東亜同文会史』（財団法人霞山会、1988年）273頁。

ちあっている<sup>22)</sup>。恐らく、中野は閑谷巒とその経営者西毅一との関係を起点として、〈日中〉のあり方を問うアジア主義実業家と連携するにいたったのだろう<sup>23)</sup>。

#### 4 『鳴滝園帖』にみる文人趣味——星島と南岳

本章では、実業家星島が恩師南岳と共有していた世界を探るため、大正元年（1912）刊行の『鳴滝園帖』に収められた跋文を取り上げたい。『鳴滝園帖』とは、星島の別荘鳴滝園を訪れた文人墨客が残していった画や詩歌をまとめた作品集のことである<sup>24)</sup>。星島は同書にみずからの跋文を収めているが、そこで次のように述べている。

吉備之児島宇野港鳴滝園者園主之一別墅也。港去岡城鉄路西南二十里瀬戸内海風光明媚。而園在其駅埠南西十余丁。高嶂危巖水落澗深園主悠然煮茶独笑之处。我師藤澤香翁選宇野八景之一所謂鳴滝園晴嵐是也。園主欲築此港此鉄路苦辛十余年。及兩者之成乃得髯父之贊經始此墅。而性慢故僅通小径於溪間耳設草廬於松陰耳。醒然香翁再遊為名士類至焉。夫赤壁之景得蘇公之文。其名顯著吾園亦僻地之一溪流耳。而香翁為此園之坡公。園名及十二勝實香翁所命也。園主取得木堂犬養國士題字。併揭南河松窓岡田君之詩西備僊山杉野君之画岡府直廬岡翁之歌。皆嘗游此園之士也。謹請天下之詞宗画伯歌作唱和兼摸写。欲以發揚此園以酬香翁之恩也。園主者誰。児島藤里之一農夫姓星島名謹字士信也<sup>25)</sup>。

22) 白岩家と西家との間を媒酌した野崎武吉郎〔嘉永元年（1848）-大正14年（1925）〕は号龍山、児島郡味野村の地主の長男として生まれる。廃藩置県後の新岡山県発足に当たって会計廩を拝命、以後明治10年（1877）に至るまで勸業掛、勸農掛として出仕した。明治20年（1887）には十州塩田組合本部長に就任。明治23年（1890）貴族院議員に当選、以後16年間議員活動を展開する。大日本塩業同志会の創立・経営に参画、明治38年（1905）の塩専売法公布にも尽力した。また西村茂樹らと交流して日本弘道会会長に就任する（前掲『岡山県歴史人物事典』、771,772頁）。

中野とともに媒酌を賛助した田辺碧堂〔元治元年（1864）-昭和6年（1931）〕は名為三郎、浅口郡長尾村の庄屋の三男として生まれる。玉島紡績に入社したのち取締役に就任。この間、野崎家の理事に就任。武吉郎の貴族院議員活動を補佐、同家の塩業発展に尽力した。明治31年（1898）衆議院議員に当選。一方、野崎の貸費生であった白岩を補佐、白岩と大東汽船、湖南汽船を創設し、日清汽船の取締役に就任した。大正期に入ると、詩社〈詠社〉を結成するとともに大東文化学院教授に就任する（前掲『岡山県歴史人物事典』、622頁）。

23) 中野はみずからの著作に西毅一の追悼文を収載する形で閑谷三烈士〔閑谷学校で学んだのち日清貿易研究所に入所、日清戦争に従軍して戦死した人々〕を顕彰している（中野寿吉『生芻一束』非売品、1895年）。

24) 『鳴滝園帖』の書誌情報については、玉野市史編纂委員会編『玉野市史』続編（玉野市役所、354~356頁）。同書には跋文の書き下し文が収載されていて参考になるが、文字解読の誤りが多数見受けられる。

25) 星島謹一郎編『鳴滝園帖』（非売品、1912年）〔関西大学総合図書館泊園文庫蔵〕。

このように、鳴滝園とは星島の別荘の一つであり、児島半島の宇野港から南西十余町に位置した。宇野港は明治42年（1909）に築かれたが、翌年には国鉄宇野線の開通と同時に四国高松と結ばれた。いわゆる宇高連絡船の就航である。星島はこの港湾と鉄道の建設に関与したという。苦心のすえ両者が完成したところで父の賛同が得られ、別荘を建設する運びとなったらしい。星島の父啓三郎は何らかの事業観を持っており、星島がそれを遵守していたのだろうか。この別荘についてであるが、南岳がしばしば訪れていたという。そもそも鳴滝園という名称それ自体が南岳の命名によるものであった。星島は鳴滝園内の十二勝の命名についても南岳に依頼しているが、それに際しては南岳を赤壁で詩賦を詠んだ蘇軾に擬えている。同園は南岳を結節点として地元名士が集う文化交流の場となった<sup>26)</sup>。星島はこうした南岳の恩に報いるため『鳴滝園帖』を編むにいたったが、その内容である詩・歌・画の構成を見ても南岳を中心に位置づけたものとなっている。

以上のように、星島は地方の名望家ないしは実業家として港湾や鉄道といった地域の公共インフラの形成に寄与していたが、その一方で「農夫」と自称するようにあくまで農村で起居する文人として強く自任していたように思われる。そしてその自己イメージの形成には泊園で学んだ漢学教養や南岳のカリスマ性が深く関わっていたといえるだろう。

## 5 『教育博議』にみる政教構想——中野と南岳

本章では、実業家中野が恩師南岳と共有していた世界を探るため、明治28年（1895）刊行の『教育博議』第5号に収められた「儒教管見」を取り上げたい。『教育博議』とは、西村茂樹の依頼を受けて南岳が設立した日本弘道会大阪支会が発行した機関誌のことである<sup>27)</sup>。中野は同書

26) 『鳴滝園帖』に南岳とともにその詩文が収載された岡田松窓〔元治元年（1864）-昭和2年（1927）〕は名寿一郎、河内国丹南郡岡村（現藤井寺市）の庄屋の家に生まれる。村一番の有力者、名望家として地域経済の振興に寄与した。もと土屋鳳洲に学び、のち漢詩文結社「逍遙遊社」のメンバーとなり、明治39年（1906）6月南岳と出雲・伯耆の旅行に随行するなど、南岳の親しい門人であった。土師神社（道明寺天満宮）における孔子の祭り「釈奠」の実施にも援助を惜しまなかった。漢詩集に『松窓詩鈔』『松窓遺稿』がある。墓碑文は南岳の子で泊園書院第四代院主藤澤黄坡の撰（前掲『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1——』、377頁）。

『鳴滝園帖』にその和歌が収載された岡直廬〔弘化4年（1847）-昭和8年（1933）〕は岡山城下岡山神社祠官の長男として生まれる。元治元年（1864）社軍隊小隊長となり、維新動乱にかかわった。安仁神社、吉備津神社の欄宜を歴任、皇典購究所や神道事務局などの要職にもついた。明治21年（1888）岡山師範学校の教師となり、以後19年間にわたって岡山尋常中学校、山陽高等女学校などの教師を務めた。一方、学究の徒として古事記など古典の研究、風雅を解する歌人として多くの和歌を残し、大勢の門下を育成した（前掲『岡山県歴史人物事典』、234頁）。

27) 『教育博議』の書誌情報については、真辺将之『西村茂樹研究——明治啓蒙思想と国民道徳論——』（思

においてみずからの論説「儒教管見」を投稿しているが、そこで次のように述べている。

「聖人之道」は政道なり。之を講明せる「孔子之教」は政治学なり。宗教には非らず。儒教の名当らず。孔子は政治家なり。宗教家に非らず。孔子の学問は実験学なり。応用学なり。哲学に非ず。論理に非ず。「孔子之教」は治者の学なり。被治者の学に非ず。徂徠曰聖人之道、安天下之道也と。聖人の政道廃して儒教起るは猶我先王の政道衰へて神道出でたるが如し。吾人は神道なるもの世に出でさりし以前に王朝の文物制度が如何に斉整善美なりしかを追思慕望するなり。儒教も神道も宗教としては甚た価値なし。仏教耶蘇教と比すべくも非ず。元来宗教たるの性質に非ればなり。漢学者神道家中、自己の教義こそ最上なれと誇顔に仏教耶蘇教と抗衡せんとするものあり。彼等は其道に不忠なるものなり。自ら其道を小にするものなり。神道の祖なる我先王は仏教を容れて其政道の一部なる教化の事を行はしめたり。則ち仏教は先王政道の役者となりたり。耶蘇教も亦斯く為し得られざるの理なし。

「聖人之道」「孔子之教」も亦他の宗教を以て其政道施行の役者とするこそ至当なれ。攻撃す可き筈のものに非ず。孔子曰、攻異端斯害也已と。孔子にして宗教家あれば或は哲学者ならば焉んぞ此の如きの言を發せん。ミル曰く真理は弁難攻撃中より顕はると。当に斯く言ふ可きなり。孟子に至りては既に宗教家根性となれり哲学者根性となれり性善の理論に熱心し揚墨の攻撃に従事す皆な孔子の氣象にあらず<sup>28)</sup>。

このように、中野にとって「孔子之教」とは政治学のことであった。中野によると、「孔子之教」は政道＝〈聖人がその領土を平治するために制作したもの〉を講明するのであって、宗教＝〈誰かが個人的信条を勝手気ままに流布したもの〉ではない<sup>29)</sup>。それは徂徠『弁道』に「聖人之道、安天下之道也」とある通りである<sup>30)</sup>。それゆえ、聖人は政策・兵略・技量を兼ね備えた政治

文閣出版、2009年)の第7章「日本弘道会とその支会——西村思想の裾野——」の第5節「大阪支会」。同書によると、西村の論説は『教育博議』に一度しか掲載されておらず、日本弘道会大阪支会は「本部と没交渉の自立的姿勢」(同書、311頁)があったという。

28) 坂本栗夫編『教育博議』第5号(教育博議社、1895年)19,20頁〔関西大学総合図書館泊園文庫蔵〕。強調点は原著のまま表記した(以下、同様)。

29) 「彼堯舜氏黄帝氏は自ら教義を創して宗教の教祖なる釈迦、基督其人の如きものには非ず。唯彼等は其領する国土を平治する政道を制作して其政道、端なくも後人の模範となり相襲用して禹湯文武に至りしのみ」(同上、17頁)。「仏と耶蘇とは政府の命令を受けて布教するものに非ず。自己の信するところを自己の自由に弘通するなり。故に之を宗教と謂ふ」(同上、16頁)。

30) 当該箇所の原文には「孔子之道。先王之道也。先王之道。安天下之道也」とある(『荻生徂徠 日本思想

家なのであって、孔子についても彼らと同じく政治家であった<sup>31)</sup>。また中野は孔子の学問は現実との関わりの中で機能するものと考えており、それは哲学・論理学ではなく実験学・応用学だという。そのため、中野は徂徠『論語徴』の解釈を踏まえつつ、仏教やキリスト教を一方向的に排除することはしない<sup>32)</sup>。なぜなら、彼は他宗教を政道の役者と見なすことによって、みずから信奉する「孔子之教」に取り込めると考えるからである。その結果、中野は孟子が他学派を排斥する目的で説いた性善説を批判するとともに、啓蒙思想家ミルが説いた弁難による真理の追究（『自由論』）を支持するのであった<sup>33)</sup>。

以上のように、中野の政教論は道を聖人の制作物とする徂徠学を基本としつつ、他宗教や啓蒙思想との融合を図るものであった。ただ、中野の秩序観には和漢の古代への回帰を通じた社会統合のイメージがあるため、その寛容な態度もそれへの奉仕を前提条件としていたものと考えられる。こうした前提条件付きの寛容な態度については、明治20年代初頭における南岳の議論にも見られるものであった<sup>34)</sup>。推測するに、中野は南岳の秩序観を信奉していたのだろう。

## おわりに

本稿では、近代における泊園書院出身者の事業活動の一事例として、岡山県の実業家、星島謹一郎と中野寿吉に注目し、彼らの経歴を通して事業活動を明らかにしつつ、それを支える意識とは如何なるものであったか、という問題に幾らか接近することを試みた。

彼らはともに富農の子弟として幕末に生まれた。星島の家は大庄屋を務めるほどの豪家であ

---

大系36] 岩波書店、1973年、200頁)。

31) 「然れども其実堯舜は偉大なる政治家のみ。禹湯文武も亦然り。政策もあり兵略もあり技倆ある政治家たりしなり。豈に人情に外れたる天上界の人物ならんや。小説的の人物ならんや」(前掲『教育博議』第5号、18,19頁)。

32) 『論語徴』甲の為政第二によると、徂徠は、「攻」を「治むる」と解釈する朱子は「異端」とは諸子百家や仏・老の書だと理解しているが、それは誤りであって「攻」は「鼓を鳴らして之を攻むる」ようなことであり、「異端」とは人が自分と異なる考えを持つことだという(『荻生徂徠全集3 経学1』みすず書房、1977年、427,428頁)。

33) 『自由論』には「沈黙させられた意見が、たとえ誤謬であるとしても、それは真理の一部を含んでいるかもしれないし、また実際含んでいることがごくふつうである。そして、ある問題についての一般的ないし支配的な意見も、真理の全体であることは、めったに、あるいはけっしてないのだから、残りの真理が補足される機会をもつのは、相反する意見の衝突によってだけである」とある(『世界の名著38 ベンサム J.S.ミル』中央公論社、1980年、275頁)。

34) 前掲『泊園書院の明治維新——政策者と企業家たち——』の補章2「藤澤南岳の世界認識に関する考察——正徳・公平・天人の諸概念を中心に——」の第2節「[公平]に西洋の[実験]を読む——私利を排しつつ公利を求めて」。

った。中野の家は不明な点が多いものの、株主となって企業運営に関与すると同時に地元で村長を務めるほどであったから、星島家には及ばないものの比較的裕福な家ではあっただろう。また彼らは犬飼松窓や西薇山（毅一）といった地元の高名な漢学者に師事したのち、明治10年代にかけて泊園書院で学んでいる。

泊園書院における両者の就学態度には明らかな相違を確認することができる。当時の成績表から両者の就学期間を見ると、星島は1年間の在籍であったが最後の2カ月は「不勤」の印が押されており、実質的には10カ月の就学であった。それに対して中野は約4年半も在籍しているが、星島のような就学態度のムラは見られない。次に両者の等級推移を見ると、星島が六等上→五等という一回の昇級にとどまるのに対して、中野は六等→五等→四等→四等上→三等下→三等上→二等下→二等中→二等上という計八回の昇級であった。この違いは同じ実業家でも文人型と学者型という両者の存在形態として現われてくると同時に、そもそも両者が泊園書院の教育に求めるものが異なっていたことを示している。

実業家としての活躍は、星島が明治30年（1897）に星島銀行を創立して頭取となり、中野が明治27年（1894）に実業界入りするなど、ともに日清戦争前後に本格化した。彼らはその後、地元の銀行業、鉄道業、紡績業の企業運営に積極的に関与している。ただ、彼らは実業家というよりも名望家としての自意識が強かったのだろうか、星島は港湾建設や干拓事業、中野は学校設立や紛争調停にも関与するなど、注力分野はそれぞれ異なるものの、ともに地域の公共的活動に情熱を傾けている。また彼らは経済分野ばかりに注力していたのではない。経済分野に注力する以前もしくは注力すると同時に、彼らは戸長村長もしくは地方議員として活躍している。星島は国政進出、中野は政党支援というようにそれぞれ方向性が異なるものの、ともに政治分野でも積極的な活動がなされている。

では、上記の政治・経済分野にわたる事業活動を支えた彼らの意識とは如何なるものであったのだろうか。まず泊園書院の入塾前・退塾後を踏まえて星島の経世意識を見ると、彼が関心を持った言説には一貫して「普天」「舜田」「九臯」「旻天」「聖人」「孝悌忠信」「礼儀廉恥」「器械窮理」「利用厚生」「開物成務」などの儒学的言語が散りばめられていたことがわかる。また星島は泊園書院の退塾後は自由民権や進歩開化といった西洋近代の価値観が抱える負の側面を意識していたことも理解できる。次に交流する舞台としての〈地域〉・〈日中〉を踏まえて中野の経世意識を見ると、彼は学問と事業を一致させようとする意識の中で〈地域〉における事業活動を展開していたが、その活動はやがて閑谷巖とその経営者である西毅一との関係を起点として〈日中〉にまで広がるものとなった。そこでの中野の構想は彼自身の急逝もあって不明であるが、彼の〈地域〉における同志であり、かつ、ともに東亜同文会に入会した坂本金弥の東



京赤坂の邸宅が、のちに中国同盟会の結成の舞台となった事実から考えると、それはやがて辛亥革命にまで繋がるものであったかもしれない。

次に、星島・中野・南岳の三者が共有した意識とは如何なるものであったか。これについては次の三点にまとめられるだろう。すなわち、①古代中国の聖賢の政治的手腕を高く評価し、彼らの生きざまにみずからを重ね合わせる意識、②社員に論語講義を施し詐偽抑制のための廉恥を説くなど、実際の効果を重視する意識、③同志社や適塾など洋学系統の知人からの刺激を受けて、より調和的な漢学を志向する意識、の三点である。本論で見たように、これらの意識は南岳の明治20年代初頭における議論、すなわち①については、管仲の制作の意図を理解すべしとする議論、②については、泊園学は西洋でいう実験学だとする議論、③については、仏教と耶蘇は泊園学の一端だとする議論においても同様に展開されていた。

しかし、こうした学問としての漢学、またそれを背景とした意識に注目するだけでは彼ら泊園書院出身実業家の実像には迫れないかもしれない。確かに、中野は学問として漢学を捉え、それを踏まえてあるべき社会秩序、それも古代回帰を媒介としたものを構想し、実際にも自己を含めた組織の統治強化に役立てていただろう。だが、文人型実業家の星島の場合、地元名士たちと交流する際の趣味として漢学を捉え、またそのことによって事業活動に不可欠な社会結合や情報交換の場を獲得していたと推測されるからである。

この学者型実業家——学問としての漢学、文人型実業家——趣味としての漢学という構図は、漢学教養を持つ実業家の実践的立場を分類するうえで有効な座標軸となりうるように思われる。ただ、泊園書院出身実業家は少なからず両軸の要素を併せ持っていただろう。星島にも学者型実業家の要素があったからこそ、窪田次郎や岡本巍らが説く政治的かつ理念的な言説にも関心を示すにいたったのである。そして何より問題とすべきなのは、彼らのような漢学塾出身実業家たちが、当時の「実業家」像を作り上げていったかどうか、もし作り上げたのであれば、そのことが近代日本の政治・経済・文化の諸相に何をもたらしたか、である。つまり、個々の実業家の社会的影響力の大小云々よりもむしろ総体としての実業家集団の知の新たな枠組とその実践がもたらした歴史的意味を問う方が重要であると思われる。

なお、中野がその経営を引き継いだ玉島紡績は泊園書院の門人難波二郎三郎が設立したものであり、中野が経営した吉備紡績（玉島紡績の後身企業）を引き継いだ倉敷紡績の経営者大原孫三郎は青年期に閑谷齋で学んでいる。近代岡山における地域経済の勃興は漢学教養人の事業熱に負うところが大きかったのであり、彼らの当時の意識内容を解明することは従来イメージされてきた古臭い漢学像を一新する可能性を秘めているだろう。本稿では、岡山という一地域に限定されており、その登場人物もわずかでしかなかったが、今後も他地域における考察を積

み重ねることを通して上記の可能性に挑んでいきたい。

**【付記】**

本稿は、科学研究費助成事業若手研究（B）「大阪漢学と近代企業家に関する研究——泊園書院と重建懐徳堂を中心として」（課題番号17K18250、横山俊一郎研究代表）における成果の一部である。